

2005年 4月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

2005年4月  
第 49 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
 編集責任者 宇 田 川 幸 子



## 目 次

点字から識字までの距離 （知的障害の方への図書館サービス）	
ふれあいセンター福祉作業所でのサービス（山内 薫）	・・・ 1
私の IT （岡田 健嗣）	・・・ 4
酔夢亭読書日記（9）（安田 章）	・・・ 7
地名苗字読み解き事典	・・・ 10
<差別語・不快語>考（一）（岡田 健嗣）	・・・ 14
ご報告とご案内	・・・ 18
漢文のページ	・・・ 21

## 点字から識字までの距離 (45)

### 知的障害の方への図書館サービス (5)

#### ふれあいセンター福祉作業所でのサービス (2)

##### 山内 薫(墨田区立緑図書館)

ふれあいセンター福祉作業所での貸出はお昼休みの三〇分位がピクで、その後は話し好きの利用者と例えばサツカー等いろいろな話をしながら残りの時間を過ごしていました。

何人かの利用者はテレビを見たり、オセロゲームをやったりしていますが、多くの方は食事が終わって本を借りてしまうと作業の部屋やロッカールームに行ってしまう。昼休み終了までにはまだ二〇分位の時間がありますので、特別養護老人ホームなどでやっている紙芝居をやってみようかと思いました。

二〇〇〇年の七月に「なしとりきょうだい」という日本民話の紙

芝居をやってみたところ、三人程が聞いてくれました。翌月にはセンターの職員の方が呼びかけてくれたおかげで、十名ほどの利用者が見てくれました。なかには動物の紙芝居をやってほしい等の希望を言って下さる方も出てくるようになりました。

紙芝居を見てくれる方の半数は、日頃本やCDを借

りない人たちでした。

紙芝居の上演ではただ普通にやるのではなく、時に応じて小道具を用意したり、歌を入れたりすると、より喜んでもらえることも分かってきました。

「いなばのしろうさぎ」の紙芝居をやった時には、自宅近くで取った蒲の穂を持っていき、小さな白いうさぎのぬいぐるみを語り手に見立てて話を進め、しろうさぎがワニ

に皮をむかれ海の水で肌が赤く腫れあがった場面では、そのぬいぐるみを紙芝居舞台の前に寝かせ、私が大黒様に成り代って蒲の穂でうさぎのぬいぐるみをなめました。

「ドングリころころ」という紙芝居では実際にドングリを持っていき、伴奏に合わせてみんなで歌を唄いました。「アンパンマン」の紙芝居をやる時にもアンパンマンやばいきんまんの小さいぬいぐるみを持っていて、それを語り手にして上演します。このようなちよつとした演出によって、より楽しんで見てもらえるように思います。



「ドングリころころ」という紙芝居を歌を唄いながら上演しているところ。

ふれあいセンターでのサービスを『図書館雑誌』という雑誌で紹介したところ、その記事を読んで見学に来た市川市の学校司書の方が、科学遊びをやってくれることになりました。透明のビニール袋にたつぷりと水を入れ、その袋をとがった鉛筆で刺したらどうなるか、それを頭の上でやるけれど、誰か実験台になってくれる人、と問いかけたところ、普段は全く言葉でコミュニケーションをすることのなかった人が何人か手を挙げて、実験台になってくれました。

その後もう一度その学校司書の方が来て下さった時には、『魔女図鑑』（金の星社）という本を紹介方々、その本の中に載っているコウモリの切り抜きを希望者につけてもらい、みんなの作ったコウモリをつなげて飾りにし、壁に飾りました。

この時参加してくれた六人の内やはり五人は普段資料を借りない人たちでした。

その内の一人の方は今まで全く話をしなかった人でしたが、それ以降話しかけてくれるようになり、たまに資



みんなで作ったコウモリをつなげたところ

料などを借りて下さるようになりました。ふれあいセンターでは紙芝居やゲーム、レクリエーションなどが、利用者とコミュニケーションをとるためのきっかけになっており、こうした小さな行事で楽しんでもらえることがうれしくもあり、また重要であることを痛感しています。

さて、ふれあいセンター福祉作業所での貸出も七年近くを経過して順調にサービスを展開していますが、その中で感じたことや試みたことを整理してみたいと思います。（『図書館雑誌』二〇〇〇年五月号、ステツプアップ講座「知的障害者へのサービス」での報告に近況を交えたものです。）

### ①一人一人の関心事を見つけることがとても重要

タレントや野球・サッカー、鉄道関係はもとより、お祭りが好きで神輿にとっても関心を持っている人、東映の時代劇が好きで高田浩吉や東千代之介の写真が出ているものを希望する人、ヌード写真集を持って行くと借りてくださる人、必ずドラえもんの漫画一冊とCDを借りる人、やさしい手芸の本、ペットや動物の写真の出ている本、東京デイズニールランドのガイドブック、日本の昔話の絵本、絵入りのやさしい英語の辞書等々、概し



て興味や関心、借りる資料が決まっている人が多いようです。

そうした一人一人の関心事を通してコミュニケーションを図れることが多いので、それに合わせた資料を持つて行ったり、関連する話題について話かけたりと、会話に発展させていく必要があります。最近では「冬のソナタ」の本をリクエストする人も出てきました。

**②一人一人とコミュニケーションを取るのが難しい**  
しかし作業所では皆さん障害の程度が様々で、一人一人の方とどのようにコミュニケーションをとるかが大きな課題です。

全く話さない人、僅かに名前だけは確認できる人、同じ言葉を何度も繰り返すだけで真意を測れない人、言語障害があつて話していることを理解するのに時間の掛かる人等々。

逆に頻繁に話しかけてくる人や握手を求めてくる人などもおり、十分時間を取つて相手になることができない場合もあります。

軽度の人には「自分は中途半端な状況だから周りに気を使うことが多く、ファンである大沢たかお以外にも森繁久弥の新作や四字熟語の本も読んでみたいが、他の人に余り知られたくない」と話します。

そこで施設近くの彼女の自宅に本を宅配したこともありました。

また直接図書館に来てみたらと勧めたところ、時々来てくれるようになる人も出てきました。

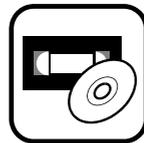
**③今までの図書館資料の概念では、とても要望に応えることができない**

図書館の資料は限られた予算の中で購入しますから、より一般的で評価の高い資料を選ぶのが普通です。

しかし、ふれあいセンターなどで利用される資料は、アイドル系の雑誌やCD、ヴィジュアルな資料、漫画などで、そうした資料を持つていかなないと興味を示してくれない人も多いのが現実です。

先日ある利用者が「したきりすずめ」の絵本を借りたいと突然図書館にやってきました。六種類ほどの本を並べて選んで貰いましたが、結局ポプラ社の西本鶏介のものを借りていきました。

絵本の評価としては赤羽末吉の福音館書店版の方がよいのですが、一般的な評価は高くても多少抽象的な絵本よりもアニメ系の絵本の方がわかりやすく取っつきやすいようです。絵本の善し悪しと利用者の好みや理解のしやすさは切り離して考える必要があるでしょう。



また図書館にある資料だけではなく好きなタレントのポスターやチラシなどを他の職員にも協力してもらって街で探し出し、持っていくことで借りてくれるようになったり、さらに様々な他の要望を述べてくれたりする人も出てきています。

#### ④一人一人のプライバシーを守ることが難しい。

名前を確認できない人はその人の名前を職員に聞かなければなりません。貸し出した資料が返って来ない場合、本人への質問では確認がとれない人の場合、親への連絡用紙を渡さなければなりません。そうするとCDは今後貸さないで欲しいなどと親から言われてしまうこともあります。

また資料を見たり借りたりするところを周りの利用者が見ていてからかかったり冷やかしたりすることもあり、一定の時間に一定の場所で貸し出しすると、本来の意味でのプライバシーが守れないと感じる場面も多くなります。

職員の中にも「そんなに借りてよめるの？」とか「聴けるの？」などと利用者にプレッシャーをかける人もいて困ります。

また、ある時突然もう借りないなどと言われたことがあったのですが、なぜなのかその原因が分からないこともありました。できれば一対一でゆっくりと時間

をかけて資料を紹介したり、貸し出す場が欲しいと思います。

月に一度の訪問を多くの利用者が楽しみにしているという実感は行き始めて半年くらいから感じられるようになりました。

今でも街などで会うと「今度いついつに来るよね」と次の訪問日を覚えていて下さる方もいます。

何人かの方は直接図書館まで来館して下さいようになります。様々な要望を出してくれるようになります。

(以下続く)

【以下の原稿は、日本漢点字協会の機関誌「新星通信」一〇一号に向けて記したものです。】

## 私のIT

岡田健嗣

私は東京で三療業を営んでおりますが、居住地は横浜市です。その横浜で、約十年前から、漢点字訳のボランティア活動を行って来ました。

ボランティア活動と言っても、私自身が行うのではなく、漢点字訳のボランティアの皆さんにご参集いただいて、「漢点字羽化の会」という名称のグループを作つて、その運営を行っているのです。勿論この運営も、実際は会員の皆さんのお力でできていますので、言わばそのような活動の上に乗って、適当なことを言っているのが、私の活動という次第です。

今回ITの活用法について書くようにというご要請があつて書き始めましたが、私は、インターネットとかOCRとか、そのようなものには縁がありません。そこで、この羽化の会の活動と、私の読書法について、ご紹介することに致します。

本会の活動は、パソコンによる漢点字訳です。パソコンを使って普通の文書を作成した後、そのファイルを、漢点字仮名交じりのファイルに変換することが、基本的な作業です。

勿論、入念な校正作業という工程を経て変換をし、変換の後には、レイアウトの整理があります。これらも一冊の本に命を入れるためには、欠かせない作業です。そして、扉を付け、凡例を付け、目次を付けて、一番後ろに奥付を付けるのが、最もオーソドックスな工程です。

最後に糊付けと表紙を付けて完成します。

これらの本には、時によって図説や地図を入れなければなりません。そんな時は、通常立体コピーを使用しています。立体コピーで触知し得る図を作るには、何度かの試作が必要です。よりよいものに仕上げするには、担当者の熟練も求められます。

本会で使用している漢点字への変換プログラムは、本会で指導的に活動して下さっている木下和久さんが開発して下さった「EIBRKW」と呼ばれるソフトウェアです。

この中には色々なフォントが格納されていて、単に点字のパターンを表示するだけでなく、立体コピーにも叶った形態の点字のパターンの表示も可能です。そのフォントを使用すれば、日本や中国の地図を作つて、地名を漢点字で示すことも容易にできます。

またEIBRKWの姉妹ソフトウェア「TENJTEXT」は、一般の大勢の方に漢点字を説明してご理解をいただく目的で、プロジェクトに表示することができます。

昨年の横浜国立大学の公開講座でも、大活躍してくれました。

もう一つ、漢点字を読む過程で最も困難を感じていたのが、他ならぬ漢字の読みでした。漢字の読みは、一通りではありません。一般にはそれを知るために、



漢和辞典が用意されています。

漢和辞典には、漢字の音読み、訓読み、意味、その構成が紹介されていて、加えてその文字の含まれる熟語も紹介されています。その漢和辞典に相当する資料が、漢点字の世界にはありませんでした。

一九九七年に、横浜国大の村田忠禧先生のお力添えで、藤堂明保編、学習研究社版『漢字源』を製作して、横浜市中央図書館に納入しました。

これは、漢字の知識を高めるのに、大変大きな力になりました。

そこで更に私は、色々なデータから熟語の読みだけを抽出して、熟語の読みを調べることのできるデータをまとめました。そのデータを検索するソフトウェアとともに、「EIBRDICW」として、ご提供できるようになっています。

このデータは、当初熟語の読みを検索するためのものでしたが、現在では大幅に規模が拡大して、漢字の構成・字式、構成上関連する文字、漢字の音・訓・意味をまで知ることのできるものに近づいております。

まさに手作りのデータですので、その充実にも時間がかかりますが、私にとって、掛け替えのない、無形の財産と言っても過言でないものです。

現在では、漢字に関する情報は、熟語の読みから漢

字の構成まで、不自由なく調べることができるようになりました。これらに市販の電子辞書を加えて、できれば読書三昧が人生であれば、これほどの幸せはないと思っております。

以上は、漢点字を通して、如何に読書するかということをお願いしました。

最後に、私が文書を書く時、どのようにしているかを述べて終わりとさせていただきます。

現在私は、パソコン上でスクリーン・リーダーの音声頼りに、一般のFEPを使用して、ローマ字変換で文字を書いています。

このようにするまでには、幾つかのプロセスが必要でした。漢点字を使っていて、コンピュータで文字を書いている人は、大なり小なりチノワードから始まる、共通の道筋をたどっているものと思われまが、ここではその道筋への言及は割愛して、ただ、多くの漢点字使用者が行っている、漢点字直接入力をしなくなった訳を申し上げます。

ものを書くという時、その作業の中に、発語と推敲という、なかなか厄介な作業が含まれます。

一般の人の、手書きからパソコンのローマ字変換へと移行する場合と





## 酔夢亭読書日記 第九回

安田 章



は異なると思いますが、私はパソコンで文字を書こうとする時、点字（漢点字も含みます）を書くのでなく、「墨字」を書く気持ちで書きたいと思いました。「墨字」で書きたいというのが何のことか、今も判然とはしませんが、一般の文章が書きたいという、実に原初的な気持ちであろうと感じております。

つまり、普通の人が普通に書くように、そのように文が書きたい。そうするには、一旦は点字の世界から離れる必要がある、その後、もう一度点字（漢点字も含まれます）に戻ることが必要だ、そう考えたのでした。

このようにして、書く時はローマ字変換で、読む時は漢点字仮名交じりだという、一つの様式が出来上がりました。

勿論、書く時に読まなくてよいのか、そういう疑問が当然出されます。

まして「書く」という行為は、「読む」という行為と切っても切れない関係にあります。

書いたものを読む、読んで直す、その繰り返しを書くことであり、「推敲」と呼ばれているものです。

そこで私は、E I B R K Wの力を借りて、「書きながら読む」という作業を試みています。

以上、私のITについて述べてみました。

「待ちぼうけ」という唱歌がある。

歌詞は皆様ご存知のとおり、兎が飛んで出て木のぬっこに勝手にぶつかってころりころりころげた、というのが一番の歌詞で、北原白秋作詞、山田耕筰作曲の満州唱歌である。

待ちぼうけ 待ちぼうけ

ある日せつせと野良かせぎ

そこへ兎が飛んで出て

ころりころげた 木のねっこ

子どもの頃からよく知っている唱歌であるが、ずっと意味はよく分らないでいた。赤塚不二雄のギャグみたいな世界でナンセンスワールドの面白さかと思っていた。

しかし、二番、三番の歌詞をみるとどうやらナンセ

ンスワールドと言うよりも人生訓を唱っているようでもある。

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
しめた これから寝て待とか  
待てば獲ものは駆けて来る  
兎ぶつかれ 木のねっこ

待ちぼうけ 待ちぼうけ  
昨日(きのう) 鋏(くわ) とり畑仕事  
今日は頬づえ 日向ぼこ  
うまい伐り株 木のねっこ



木のねっこにぶつかる兎もたわけなら、二匹目の泥鰌を期待して再び兎が木のねっこにぶつかるの待っている農夫もおおたわけである。

おいしい獲物を待ちに待った挙げ句の果てが、「もとは涼しい黍(きび)畑」が「箒草(ほうきぐさ)」が生い茂る「荒野(あれの)」になつてしまふという、なんとも心恠びしい話である。

この詞の発想の元は中国の故事に由来するということなので調べてみると、どうやら「韓非子」によつて

「宋の国の人で畑を耕している者がいた。畑の中に木の切り株があったが、たまたま兎が走つてきてその切り株にぶつかり、首を折つて死んだ。兎をもうけた彼は、それからすきを捨てて耕作をやめ、切り株のそばを離れないで、また兎を得たいと願つた。もちろん兎は二度とは得られず、その身は宋の国じゅうの笑いものにされた。」(「韓非子」 五蠹 第四九 金谷治訳 岩波文庫)

このエピソードだけを単純にみれば、確かに人生訓としても読めるわけである。しかし、韓非子が意図したことは、そんな人生訓を垂れようとしたわけではなかった。「その身は宋の国じゅうの笑いものにされた。いま古代の聖王の政治によつて現代の民を治めようとするのは、すべてこの切り株のそばを離れずにいるのと同じたぐいである。」(同上)と断定し、理想主義的な儒家たちを鋭く批判しているのである。つまり、この「守株(しゅしゅ)」の話は儒教批判がテーマなのである。

儒教といえばなんと言っても孔子さまがその祖である。そしてその系統に儒家としての荀子があり、韓非は荀子に学んだということである。

「韓非というのは、韓の国の公子である。刑名法術の学説をこのんだが、その帰着するところはやはり、

黄・老の説であった。韓非は生まれつき吃りで口で述べるのはうまくなかったが、著書にすぐれていた。

李斯と同じく荀卿（じゅんけい）に師事したが、李斯は韓非におとると自認していた。「（史記列伝」

小川環樹他訳 岩波文庫）

荀卿というのは荀子のことであり、「性善説」の孟子に対し、「性悪説」を唱えたことで有名である。

現代においても人間性一般について書生論議をする  
と必ず、人間の本質の問題に行き着くことが往々にしてあるが、なかなか決着はつかない。人間の性は善であるか、悪であるかなどと議論百出の青春時代を思い出す  
すが、幼い経験と凡庸な頭脳からは結論が出るべくもなかった。

それはともかく、儒家の荀子に学んだ韓非はやがて儒家を批判的に乗り越え、法家としての立場を鮮明にしていく。

「古代の聖王は天下の人々をひろく愛したので、父母のような態度で民衆にのぞんだ」なんて嘘っぱちだ、ちゃんちゃらおかしい、民なんて甘やかせばつけあがり、おどせば服従するものだ、そんな当たり前前  
の認識もなく理想を並べ立てるのは偽善といわないでなん  
んといふべきか。

韓非の厳しい儒家批判に感銘したという秦の始皇帝

がやがて焚書坑儒の政策をとるのは、ことの必然である。韓非と秦の始皇帝が歴史の時空で出会い、心  
シンクロさせる様子を想像してみることも楽しいこと  
である。

唱歌「待ちぼうけ」は、満州で暮らす日本人の子  
も向けにつくられたものだそうだ。

満州といえば最後の皇帝（ラストエンペラー）溥儀  
が元首となり建国された満州国があるが、日本の傀儡  
国家であることから、偽満州国（偽満）であると中国  
からは非難されたのである（欺瞞と間違わない  
で！）。

日本の軍国主義が進み、滅亡へと転がっていく中、  
満州に住んでいた日本人の子どもたちがどんな心情で  
「待ちぼうけ」をうたっていたのだろうか。

中国の最初の皇帝始皇帝と最後の皇帝溥儀がはから  
ずも唱歌「待ちぼうけ」を介して繋がった、というべ  
きか。



【二〇〇四年度、横浜市中心図書館への納入書として、丹羽基二著、柏書房株式会社版、『地名苗字読み解き事典（ちめいみょうじよみときじてん）』（二〇〇二年）が完成しました。前文から、ご紹介します。】

## 地名苗字読み解き事典

### お読みくださる方へ

辞書にはいろいろある。

筆者も苗字の辞書を書いたし、地名の辞書も書いた。

しかし、その仕事をやっているうちに、「なんだ、こりや、地名と苗字は同じじゃないか！」と気がついた。

「地名にあるものは苗字にもある。苗字にあるものは地名にもある」そうだ。

これをいっしょにして一冊の本にしたほうが早いやーと気がついた。

一挙兩得とはこのこと。

皆さんのご苗字と同じ地名がどこかにある。小林さ

んならその小林の地名を日本中から探せば、なにかに突き当たる。

「何？数が多すぎて、無理だって？」でも関東の小林か九州の小林ぐらいは分かるだろ。

「わたしの苗字は、難姓で、地名にはない」「しかし、そう断言できるかどうか。また見つかぬ場合もあるし、消えたこともある何しろ、地名は一〇〇〇万もある」ただ、ほんとうに地名にないものもある。

外来姓、職掌姓、屋号姓、創作姓のようなものもある。しかし、これらは地名姓からみるとほんのひとにぎり。

約一〇パーセントほどだ。かえってルーツは分かりやすい。

九割近くが地名だ。

以上に気がついたので、少しこれらを集めてみた。

名付けて、

『地名苗字読み解き事典』

事典にして読みもの、読みものにして事典。

この中に、あなたの求めるコトバ（苗字・地名）がなくとも、ご自分で探し、ご自分でしらべることが出来るかもしれない。

この本を参考にして、ご自分の苗字を読み解いてく

ださい。

最後にひとこと。

苗字の多くは「やまとことば」、すなわち固有の日本語です。苗字・地名は日本文化の原点。

大切にしましょう。

著者

(本文から)

## 苗字は地名のデータベースだ

### 富士山の頂上から地名を眺める

富士山のテッペンから四方を見渡せば、山あり、川あり、野あり、森ありで、その自然は美しい。田子の浦の先の先には白帆が浮かんでいることまで見える。

それらの地名は千数百年もの間に先人がつけたものだ。たくさんあるが、南をむいておもな地形・地名を二、三〇ひろってみよう。

(中略)

以上三〇の地名の中で苗字にみられないものには傍線をつけた。

(略) その割合は八〇パーセント。

だがここでちょっと待った。宝永山も「宝永」と「山」に二分すればどちらも苗字にある。「日影」「林」「狩野」「川」「吹上」「浜」、もみな同じ。



「田子の浦」は苗字にないが田子浦はある。よみはやはりタゴノウラ。

だから、富士山のテッペンから南側を見渡しても、地形・地名はほとんど苗字になっていることがわかる。村や市や町などのついた文化地名も大体苗字になっている。たとえば「富士」「市」「富士宮」「市」「富士川」「町」なども富士と市、宮、川、町に分解してみるとみな苗字にある。

### J R 山手線を巡る

富士山から眼下を見おろせば地形・地名がさまざまに映るが、同様に、東京駅から、山手線に乗って都内をめぐってみよう。結論を先に言えば駅名には文化地名が多く、そこに建てられた神社仏閣をはじめ、庁舎、橋名、人名、建造物などに由来するものが多い。しかしそのもとをたざると、やはり自然地名が多いことは変らない。山手線二九駅名中苗字にないのは五駅。この割合は一割七分で二割にも満たない。しかし有楽町を除いては駅名を二つに分解すると、みな苗字にみられる。たとえば、高田馬場は高田と馬場に分けられ、どちらも苗字にある。新大久保や西日暮里も同様だ。有楽町は戦国武将で、織田信長の弟織田有楽斎(うらくさい)の江戸屋敷跡、

浜松町は名主（なぬし）権兵衛が遠州浜松の人だった。

以上で駅名はほとんど苗字にあることがわかる。

東海道五十三次の宿場で当ってみたがやはり割合はおなじで、苗字の八割から八割五分は地名である。

### 山の代表者 山本さんの読み解き

山の字のつく苗字の中で最多のものは山本姓。これが人口約一一〇万で十大姓の第六位。ついで一一位の山田姓で約八〇万、一五位は山口で約七〇万。つぎは山崎、山下、山中とつづく。

いわゆる山族である。山上姓もあるが約七万で少ない。山だけの姓もある。

日本は山国で全土の八割近くが山地。だから、山の中に住み、木の実をたべ洞穴に住んでいたことはわかる。しかし山の中に住むには、食糧も不自由だし、高い文化を築くことはできない。山はわれわれの祖先のすむ聖地で、子孫は山のふもと―山本に住むのが自然なのだ。山の麓の日あたりのよいところに居を構え、近くを流れる川を利用し耕地をつくる。ここで、川の幸（さち）と山の幸の両方を利用する。危険が近づく、山の中に逃げる。山は祖地だから、神が守ってくれる。それゆえ、山本（鹿児島県では山下、山口、山



元、麓（ふもと）などにもなっている）は最良の条件で人口もふえた。地名を「国土地理院」（二万五千分の一）の地図でしらべてみると約一三〇カ所あるが、小地名をふくめるとこの二〇倍あることは確実である。

史上有名な山本の地名は滋賀県湖北町山本。旧称では近江国浅井郡山本郷で清和源氏義光流の発祥地である。しかし山本氏は多く山の神に仕える族なので神官が多い。上賀茂、下鴨の賀茂県主（あがたぬし）系、伊勢神宮の神主荒木田、度会（わたらい）氏流などがこれである。ほか、佐々木氏流、菅原氏流、桓武平氏流などもある。一〇〇万を超える大姓なので諸流があるのは当然であるが家紋は九曜（くよう）、桔梗（ききょう）、巴（ともえ）、釘抜（くぎぬき）、柏（かしわ）、鷹（たか）の羽など。ことに三つ巴が多い。これは神に仕える印（しるし）である。

つぎに付け足しに山田姓にふれておく。

これは大姓一〇位には入らないが、それでも一一、一二位にあり、人口は約八〇万ほど。山田という文字から、山系にも入るし、田系にも入る。両要素から生まれた苗字で、古名族でもある。中臣（なかとみ）氏流、蘇我氏流、物部（もののべ）氏流もあって、史上大いに活躍した。地理的にみると、山田は平地の少ない山国の必然的な産物で、山の斜面にまで棚田をつくったことから、地名、苗字がおこった。山田こそは、

山国日本の苗字の特質をもっともよく示した苗字ともいえる。

(中略)

## 苗字と名、氏と姓

「苗字という語はへんなことばだね。」

(略)「うん、〈苗〉の文字には植物の苗(な



え)の意がある。植物は苗から生長してだんだん大きくなる。そのナエから家(いえ)のモトとか血筋とか出自とかの意になり、やがてこの文字を家名に使うようになった。江戸のはじめだね。そのまえは多く名字(みょうじ)の文字だ」/「じゃあ、名字とは?」/「中世における名田(みょうでん)からくる。名田とは、上位の支配者から下賜された領地。その地名をいう。田が中心だから名田(みょうでん)。その名田と同じ名称を支配者は名乗(なの)るので名字(みょうじ)といった。足利氏は清和源氏義家流だが下野国(しもつけのくに)足利荘を所有していたので足利を名字とし、同族の新田氏は、上野国新田荘を所有して新田氏を名乗った」/「苗字と名字はまったく同じというわけではないのだね」/「その通り。名字のほうは名田の名称からきているが、苗字のほうは、単に祖先が同じ(血脈)ということを強調しているだけだ。」

名田の所有が近世にはない。単なる石高(こくだか)で、武士は藩主に仕えていた。だから名田(みょうでん)の名(みょう)は名乗れなかった」/「国語辞典などを引くとその区別は出てないね」/「旧文部省やマスコミも名字の文字を使っているが、いまの家名としては正しくない。さらに苗字と名字を同一に考えているどころか、名字を正式に通用させている。役人さんも、マスコミも歴史を知らないからさ。苗はビョウでミョウではないから名のほうが正しいなんてアホなことを言ってるヨ」/「氏(うじ)という用法もあり、旧法務省では家名として氏(うじ)を正式に用いているらしいが」/「氏はもともと古代の氏(うち)、姓に由来し、のちに苗字のかわりに法務省で転用したのだが、これも古代の氏(うち)と混同がおこるので適当ではない。古代の氏は藤原氏、橘氏などの豪族などに付けられたもので豪族の集団名だ。この中心に氏上(うちのかみ)がいて、祖を祀り、一族を統率していく。だから氏から分れた家々の家名ではない。藤原の道長、源の頼朝などの(の)を入れて呼ぶのは、そのあらわれで、藤原という氏(うち)、源という氏(うち)の意が(の)にある。いまの藤原さんは「たとえば藤原銀次郎でも藤原義江(よしえ)でも苗字と名の間に(の)を入れてないのは単なる苗字で

あるからだ。江戸時代でも藤原惺窩（ふじわらせいか）は、やはり家名と名の間に（の）は入れてない」／（中略）「もう一つ気にかかるのは姓というコトバだ。これもいまはセイといって苗字のことを言う。大昔は、姓はカバネといって、古代豪族に天皇が下賜した豪族のランク付けのことだ。臣（おみ）・連（むらじ）・君（きみ）・首（おびと）・直（あたい）・史（ふひと）・村主（すぐり）・造（みやつこ）・県主（あがたぬし）などがこれだ。しかしのちに氏姓（うじかばね）などと合わせて呼んでいるうちに、いつの間にか姓も氏も同じものにみられ、のちには、名字や苗字とも同じ風にみられた。いまは姓というときとセイとか、シヨウとか音でよばれ苗字とみられる。氏が苗字とみられるのと同じわけだ」／（略）「いまは、姓も氏も名字も、苗字と同じで、家名（家号）のこと。しかし昔は、氏は豪族の集団名で、姓はそのランク、名字は、豪族の所有地（支配者）名から来た家名、苗字は祖先を表わす家名ということになる」

（著者紹介）

丹羽基二（にわ もとじ）

一九一九年、栃木県佐野市に生まれる。

一九四四年、国学院大学国文学科卒業。

「日本家系図学会」会長、「地名を守る会」代表ほか。

著書は現在まで約一〇〇冊以上。主なものとして『家紋大図鑑』『姓氏』『家系』『神紋』『寺紋』『地名』ほか（以上、秋田書店）、『日本姓氏大辞典』『姓氏の語源』（以上、角川書店）、『姓氏の由来事典』（三省堂）、『姓氏の歴史と謎』『地名の語源と謎』『家紋の由来と美』（以上、南雲堂）、『姓氏・地名・家紋総合事典』（新人物往来社）、『日本の苗字読み解き事典』（柏書房）、『お墓のはなし』（河出書房新社）、『チベットの落日』（近藤出版）、『日本苗字大辞典』全三巻（芳文館）など。

## 〈差別語・不快語〉考(一)

岡田 健嗣

私の生年は昭和二十四（一九四九）年で、いわゆる「団塊の世代」に属している。

なぜそう呼ばれるかと言えば、（我が国にとつての）先の大戦が敗戦に終わって、外地から復員した兵士らが一斉に子を設けたために、この年代に人口が集中する結果となったことにあると言う。加えて私の年代は、いわゆる「戦後民主主義」の洗礼を、初めてまともに受けた世代であって、ものの考え方や価値観が、前の世代とははっきり隔絶されていると言う、大きな特徴を持つと言われている。

この特徴が、「団塊」という呼称にふさわしいと、一般には理解されているらしい。

さらにその故かどうかは分からないにしても、一九六〇年代以後、いわゆる「全共闘世代」とも呼ばれることになる。善きにつけ悪しきにつけ私たちは、このようにして生きてきたのである。とは言え現在は、前の世代の数が減少して来ていることをいいことに、自らを単に「人数の多い世代」という意味合いを込めて、「団塊」と自称する傾向も見えてはいはないか、そう感じられることも少なくない。なぜ冒頭からこのようなことを書いているかと言えば、右の意味とは逆の立場で、私にも世代の隔絶をひしひしと感じることがあったからに他ならない。

私たち視覚障害者は、点字を使って、とりわけ漢点字使用者は漢点字を読むことで「読書」をしている。もう一つ、「音訳」という方法を通して「読書」をする。

技術の発達とボランティア活動の活発化がそれを可能にし、支持しているのだが、なぜに「音訳」されたものを「聴く」ことが「読書」なのか、これまでに十分論じられることはなかった。私はそれを幾らか試みてみたが、満足できるまでには至らなかった。近い将来「Multi Sense Readings」として論じてみたいと思っている。

が、ここでは「音訳書」が果たしている働きを、「量」に限定しておきたい。つまり、「触読」の最も苦手とするのが、

「量」であって、それを補うのがこの「音訳」だということ、一般のいわゆる本好きな人、あるいは「読書」が職業に直結している人の「読書」と、私たちのそれとを比較してみれば、明らかに大きな相違がある。

その相違を脇に置いて同列に「読書」と呼んだとしても、決定的に残る相違が、この「量」である。「音訳書」の出現は、その相違を大幅に狭めることとなった。また、漢点字が世に問われることで、「音訳書」の可能性とそれへの期待が、ますます拡がり、重みを増して来ていると、私は考えるものである。(別項詳述)

『文學界』(文藝春秋社)という雑誌がある。文芸誌の一翼を担う権威ある雑誌である。文芸誌にはその他に、『群像』(講談社)、『新潮』(新潮社)、『すばる』(集英社)、『文藝』(河出書房新社)があつて、大手の出版社が、それぞれ「顔」と位置づけて発行している。

『文學界』は、この四半世紀に渡って、神奈川県ライトセンターの音訳者によって「音訳」されている。活字書が発行されてほぼ一カ月の後に、視覚障害者の読者の手許に、カセット・テープ十二本になって届く。毎号六名の音訳者が、三時間ずつ担当して製作して下さるのである。もしこれが「点訳書」で提供されることになったら、どういうことになるうか？

試しに本誌『うか』を漢点字書にした場合、どの程度の

規模になるか計算したことがある。少なく見積もっても百五十ページを下らないものなることが分かっている。

本誌は、横浜市社協で活動しておられる音訳ボランティアのお力で、テープ一本の「音訳書」として発行している。そうして見ればその十二倍が、『文學界』の規模ということになる。

現在でもそうだが、視覚障害者向けに製作される「点訳書・音訳書」には、おおよその傾向がある。「公から刊行されるもの」、「社会福祉、障害者福祉に関するもの」、「一般の新聞や週刊誌・月刊誌の情報記事」と集約できる。

四半世紀前、神奈川県ライトセンターでは、一般の雑誌の「音訳」の拡充に着手された。その折り、利用者からのニーズを求めて、「音訳」の候補を選定した。

そこで私は、他にはないものを製作していただきたいと願って、文学雑誌を希望し、聞き届けられたのがこの「文學界」であった。以来、ずっと「聴読」し続けているのである。

同誌・二〇〇五年三月号のエッセーの欄に、「脱文字文化への移行」（山形浩生著）という著述が掲載された。著者は一九六四年生の翻訳家とのこと、私からハーフ・エイジ若い方である。その大要は、

①人間は様々に変化し進化して来た。



②先ず音声の言語が、それ以前の表現法・伝達法を、飛躍的に変化させた。

③次に文字が、その変化の主役として躍り出た。記憶の機能を文字が担うことで、人間の思考に、大きな変化をもたらした。

④現在進行している変化は、文字から次代へのメディアへの変化であって、従来の基準には当てはまらないものではないだろうか。ではないだろうか。

（前略）ミハイ・ナデインは『文盲の文明』（未訳）で、そうした文字に頼らない新しい文明の、現在進行形の可能性について述べている。（中略）文字は情報の伝搬を飛躍的に容易にした。その一方で、読むのは孤独な体験だ。高すぎる知性がコミュニケーションを低下させるのが問題であるなら、過度に「読む」のもまたコミュニケーションの敵だ。（中略）今すでに、映像と音のほうが本より効率が高い状況は生じつつある。読むのに何日もかかるハリポタ最新刊だって、映画なら二時間半ですむじゃないか。そして同時に、読めるようになるための訓練の時間と労力はバカにならない。ホントにそんなコストを全員が負担する必要があるんだろうか。

（中略）社会全員ががんばって読み方を勉強し、それぞ

れ個別にハリポタだの『戦争と平和』だの『裸のランチ』だのを読むよりも、みんなが手抜きでしか読み方なんか勉強せず、結果として湧いてきたこらえ性のない文盲寸前の連中が、まあ四、五ページずつ読んでそれをネットやらケータイやらでやりとりして、群盲がゾウをなでるようにしてある作品の全貌を描き出す(中略) ケータイやネットが社会の崩壊につながるといった議論はあるけれど、たぶんそれはウソだ、むしろケータイでの愚にもつかない会話によつて成立する社会とはどういうものかを考えたほうがいいのだ。》

繰り返しになるが、論旨には異存はない。

ただここに、「文盲」という語が二回、「群盲」という語が一回使用されていることと、同誌・同号の他の箇所にも、「文盲」が一回使用されていることだけ明記しておきたい。

私たちが生きた二十世紀の後半は、〈権利〉の時代であった。国連による「人権宣言」、「子供の権利宣言」、「障害者の権利宣言」の三つの宣言は、私たちの生き方に、大きな影を落としている。

「人権」の意識は、この世に生まれた者は全て、生きるに値する者として尊重されなければならない。

「子供の権利」は、生まれてきた子供には、等しく福祉と教育と医療が保障されなければならない。

「障害者の権利」は、障害者も健全者とともに、社会を

構成する一員として尊重されて、福祉・教育・医療、そして職業と余暇の活動が保障されなければならないというのである。

これらの理念を具体的に見ると、子供へのサービスである「教育」に「義務教育」がある。これはかつて子供とその保護者にとつての「教育を受ける義務」と規定されていたのだが、「子供の権利」の理念から言えば、「子供に教育というサービスを与える義務」として、国・地方公共団体・そして社会のあらゆる機関にとつての義務と位置づけられるようになっていく。

また同様に、障害者が社会で生活するに当たって、その障害の故に不都合があつてはならないとされて、その理念を「ノーマライゼーション」と呼んでいる。この「ノーマライゼーション」もかつては、「障害者をノーマライズすること」と理解されて、障害者をじゃまにならないよう矯正し、社会に適応させることと解されていた。

しかし現在では、「障害者も一員として生活し得る社会作り」という意味、すなわち社会の変革を意図する理念と位置づけられるようになっていく。

「権利」とは、実はこのように犯され易い、あるいは犯されても気づかれない、現在も犯され続けているかもしれないものを言うのである。そこで「差別」という概念が登場する。

当事者が「権利」を意識すると、当然叶うべきものが叶っていないことに気付かされる。それを理不尽と感じ「差別」と捉えて、社会に訴える行動に出る。私たちの周辺で、しばしば見られたものであった。

しかし世の倅いとして、犯された「権利」の回復として行われたこのような行動も、ややもすると、利を貪る行動と映る人も少なくないようで、「基本的人権」とはかけ離れた「権利」を主張する人も現れる、そんなことも珍しくないように、私には見えたのである。

そういう中で、色々な「差別」が取り上げられるようになり、その中に言葉の「差別」として、「差別語」があった。そう規定された言葉は、一般のメディアから、そつと姿を消していったのである。障害者に関連して、幾つか例を挙げてみよう。

- ・盲(もう、めくら・めしい)↓視覚障害
- ・聾(ろう、つんぼ)↓聴覚障害
- ・不具、廃疾↓肢体不自由
- ・白痴、精神薄弱↓知的障害

このように、いったいこれで「差別語」でなくなったのかと問いたいものもあるが、そのような意識が働いて、「差別」をなくそうという動きがあったと見たい。

勢い余って、「魔女狩り」に紛わんばかりのものもあって、「盲」の訓読みから「めくら」を除こうということまで

も言い出すようになった。「差別語」ではなくとも、人を不快にするような言葉は使わないようにしようというのが、「不快語」の撲滅運動で、ここまで来ると、「バッシング」というのがふさわしいほどであった。

全ての言葉は「差別語・不快語」になり得る、「どんな言葉も使えない」と言われたものである。

「文盲」という語も、そんな中であつた。

(続く)



本誌・機関誌『うか』も、九年目に入りました。皆様のご愛読に、心より感謝申し上げます。引き続き、本会の活動である漢点字書の製作と漢点字の普及へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

## 一 賛助会員のご芳名

二〇〇四年度に賛助会費をご入金いただきました皆様のお名前は、以下の通りです。順不同です。

村田忠禧様、河村幸男様、田崎吾郎様、  
加藤俊和様、松村敏弘様、佐川隆正様、  
飯田みさ様

誠にありがとうございます。有効に使用させていただきます。

## 二 横浜市中央図書館に、

### 漢点字書を納入致しました。

本文でもご報告致しましたように、二〇〇四年度分として、丹羽基二著、柏書房株式会社版、『地名苗字読み解き事典』（二〇〇二年）の漢点字訳が完成して、横浜市中心図書館に納入致しました。

全国各地の図書館で、貸し出しを受けることができます。

読者の皆様のご利用を、お待ち申し上げております。

また、ハードコピー、EIBファイルでのご提供もできます。ご相談下さい。

また本会では、漢点字読者からのニーズにもお応えしております。どしどしお寄せ下さい。

## 三 二つの講習会

①漢点字講習会・横浜市のご後援をいただいで、今年三年目の開催となります。

オリジナルのテキストを使用して、通信制を中心に、隔月のスクーリングによって漢字に親しんでいただくよう工夫しております。

今年度第一回目

五月五日（日）

時間 14:00

場所 横浜社協・ボランティアセンター

八階、ボランティア・コーナーにて。

### ②漢点字訳ボランティア講座

六月一五日（水）から毎週水曜日・計四回、

漢点字訳ボランティア講座を開催します。

時間 13:30～15:30

場所 市社協・ボランティアセンター八階

ボランティア・コーナーにて。

内容は、漢点字のあらまし、パソコンによる漢点字訳の実際等です。

講座を修了された方には、本会にご入会ください。

て、活動にご参加いただきます。

#### 四 日本漢点字協会の「記号検討委員会」に出席しました。

去る三月二十七日

(日)、京都ライトハウス・情報ステーションで開催された、「記号検討委員会」に出席しました。トータルヒューマンネット二一の安田理事長にご同道いただきました。

メインテーマはカタカナの表記で、おおよそ本会の表記に沿ったものとなりました。

委員会に先立って、加藤理事（京都ライトハウス図書館長）のご案内で、館内を見学させていただきました。

京都は、福祉の先進地域であることを、肌身で感じて参りました。



記号検討委員会の様子

#### 五 よこはま福祉・保健カレッジ

横浜国大の村田忠禧先生からいただきました情報によりますと、市内各大学と市・市社協の間に、保健・福祉・教育に関する人材育成・情報の共有等の協定が結ばれたとのことでした。

神奈川新聞三月二三日号によりますと、

- 【一】 Humanity (人権尊重の取り組み)
- 【二】 Information (知識・情報)
- 【三】 Techniques:Skills (技術・技法)
- 【四】 Organization (組織的対応)、の四点を掲げています。

漢点字の普及という本会の活動にも深く関わって来るものと思われれますので、今後、持続的に関心を持ちたいと考えます。

E-MAIL:

[eib\\_okada@yhb.ne.jp](mailto:eib_okada@yhb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 H・P URL:

<http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

表紙絵 岡 稲子

次回の発行は六月十五日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかくお断りします。

漢文のページ

送夏目漱石之伊予

正岡子規

夏目漱石の伊予に之くを送る

去けよ三千里(ゆげよさんぜんり)

君を送れば暮寒生ず(きみをおくれれば ぼかんしようず)

空中に大岳懸かり(くうちゅうに たいがくかかり)

海末に長瀾起る(かいまつに ちようらんおこる)

僻地交遊少に(きち こうゆうまれに)

狡兎教化難からん(こうじ きようかたからん)

清明再会を期す(せいめい さいかいをきす)

後るる莫かれ晩花の残るるに(おくるるなかれ

ばんかのそこなわるるに)

明治二十二年(一八八九年)子規二十二歳、漱石二十

三歳の時知り合う。上記は明治二十八年、松山中学に赴

任する漱石を送る詩。同年八月、子規は病気のため松山

に帰郷し、漱石と再会している。十月に上京するまで約五

十日間漱石の下宿で暮した。翌年、漱石は熊本第五高等学校に転任する。明治三

十二年熊本から東京の子規に寄せた詩の中で、

憶昔交遊日 憶う昔 交遊の日

共許管鮑貧 共に許す 管鮑の貧

斗酒凌乾坤 斗酒 乾坤を凌ぎ

豪氣逼星辰 豪気 星辰に逼る

と若い頃を追想している。

去<sup>ゆげ</sup>矣<sup>イ</sup>三千里

送<sup>レバ</sup>君<sup>ヲ</sup>生<sup>ズ</sup>暮寒<sup>ニ</sup>

空<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>懸<sup>カリ</sup>大嶽<sup>ニ</sup>

海<sup>ニ</sup>末<sup>ニ</sup>起<sup>コル</sup>長瀾<sup>ニ</sup>

僻<sup>へき</sup>地<sup>ニ</sup>交遊<sup>ニ</sup>少<sup>まれニ</sup>

狡<sup>かう</sup>兎<sup>ニ</sup>教化<sup>ニ</sup>難<sup>かたカラシ</sup>

清<sup>せい</sup>明<sup>ニ</sup>期<sup>ス</sup>再<sup>レ</sup>会<sup>フ</sup>

莫<sup>カレ</sup>後<sup>レル</sup>晩<sup>ニ</sup>花<sup>ノ</sup>残<sup>そこなハルルニ</sup>

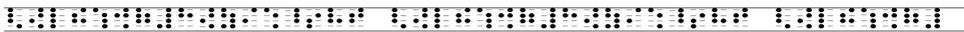
暮寒<sup>ニ</sup>夕方の寒さ。大嶽<sup>ニ</sup>大きな山脈。

長瀾<sup>ニ</sup>大波。狡兎<sup>ニ</sup>いたざらつこ。

清明<sup>ニ</sup>春分から十五日の清明節。

こころでは春休みを指す。

莫後晩花残<sup>ニ</sup>桜の花の散る前に帰つて来いよ。



送 ル 夏 目 漱 石 ノ  
送 ル 夏 目 漱 石 ノ

之 クヲ 伊 予 ニ  
之 クヲ 伊 予 ニ

去 ヲケヨ 矣 三 千 里  
去 ヲケヨ 矣 三 千 里

送 レバ 君 ヲ 生 ズ 暮  
送 レバ 君 ヲ 生 ズ 暮

寒  
寒

空 中 ニ 懸 カリ 大 嶽  
空 中 ニ 懸 カリ 大 嶽

海 末 ニ 起 コル 長 瀾 らん  
海 末 ニ 起 コル 長 瀾 らん

僻 へき 地 交 遊 少 まれ ニ  
僻 へき 地 交 遊 少 まれ ニ

狡 かう 児 教 化 難 かつ カラン  
狡 かう 児 教 化 難 かつ カラン

清 明 期 ス 再 会 ヲ  
清 明 期 ス 再 会 ヲ

莫 カレ 後 ルル 晚 花 ノ 残 そ  
莫 カレ 後 ルル 晚 花 ノ 残 そ

こな ハルルニ  
こな ハルルニ

\* 漢詩中、一部の漢字にルビを付けました。ㇿ（ルビ符）以下、マスあけまでがルビになります。

参照図書：高等学校教科書『古典一』（第一学習社）、同教科書準拠参考書（朋友出版）、『漢詩名句辞典』（大修館書店）